

戦後教育の学校教育における権威と「社会」なるもの

——「プロ教師の会」の主張の検討を通じて——

石黒正員（立命館大学大学院）

1. 問題の所在

「プロ教師の会」の諏訪哲二と河上亮一によれば、こんにちの学校教育において、「戦後教育」の理念によって教師の威圧的な指導のありかたが否定され、また消費社会が到来する中で非対称的な教師—生徒関係の意識を欠いた「新しい子ども」が出現するなど、従来の学校や教師の権威が通用しなくなったことに起因した教育の危機が生じている。こうした状況に対して、彼らが提示した主張は、学校には権力を振るう教師が不可欠であるという自らの現場性に立脚しながら、それを直視しようとしないう「戦後教育」の理念を批判するものである。

こうした「新しい子ども」が出現した 1980 年代という時代状況において、戦後教育における権威の危機、つまりデュルケムが述べたところの個人を「社会」に結びつける道徳性の危機の問題として検討したい。彼らの言説は、子どもの自由や個性を尊重せよとする理念を批判し、学校教育における怖い教師の必要性を主張するなど大きな特徴とする。もちろん、これに対して批判を加える多くの言説が登場したが、ほとんどは、学校教育における「管理」の是非についての立場性をめぐった水掛け論の域を出ないものであった。

こうした水掛け論を乗り越えた議論をすすめていく上で、学校教育における生徒を服従させる原理としての権威の内実を問うことは重要である。諏訪（2005：215）の論によれば、神という超越者をもたない日本において、学校が子どもを「一人前」にする役割を担ってきたと述べる。まず、その役割とは生徒のエゴを否定し、＜集団＞における個とさせることである。しかし、そうした機能が家庭や学校で失われてしまったがゆえに、1980 年代から自己を絶対化する「新しい子ども」が登場することになったという。諏訪は、その点について、子どもの欲望をおさつける「父性」の問題としても言及するが、これらを学校教育に権威を付与する「社

会」の問題として、いくつかの時代診断と E・デュルケムの概念とクロスすることで検討したい。

2. プロ教師の会と戦後社会の転換

まず「プロ教師の会」が、戦後教育の潮流におけるひとつの「転換期」に直面することによって始まったことを確認した上で、その背景としての戦後教育の変遷をいくつかの時代診断と重ね合わせながら、彼らが批判の対象とする「戦後教育」が置かれた状況について探っていきたい。

「プロ教師の会」のルーツは、「鎌田闘争」と「伝習館闘争」に遡るという。そして、これらの闘争に加わる過程において組織の論理を優先し労働者を守ろうとしない教職員組合に幻滅するとともに、現実に着地しない反権力という＜理念＞を唱えるだけでは不十分であると考えられるようになる。その後、彼らの意識は政治的な闘争を離れて現場における実践に向かうとともに、教師としての自らの暴力性に関き直る戦略を採ることになっていった。

このように理念と現実の乖離に直面するなかで「プロ教師の会」が生まれていったわけである。すなわち、安保闘争と教職員運動の限界に直面した彼らは、彼らの抱いていた「理想」の虚構性と、それがもたらす抑圧性に直面したのであった。

広田照幸（2001：274）によれば、1960 年代までの＜教育問題＞は、保守も革新も、「進歩的役割」を持った学校による無知への啓蒙とより豊かな生活の実現という＜問題＞を共有していたという。したがって、文部省対日教組という図式もまた「いわば『学校』という輝かしい宝箱に手を掛けた政治的諸勢力間の戦いの問題」（広田、2001：276）であった。また、三田（1995：14）は、1960 年までの「理想」の時代について、「理想主義が現実主義であり、現実主義が理想主義であった時代」、「『現実』という

ものに疑いをもたなかった時代」と述べるように、理想が現実に着地することが自明に捉えられた時代であった。

一方で、大澤は1960年代に入ると、「理想の時代」は、後期に差し掛かるという。すなわち、「理想」は、そこから政治的内実が失われて、「経済的に豊かな生」に置き換えられたという。高度経済成長に入って、「理想」は「戦後民主主義」から、マイホームや家電などの「個人的な理想」へと転態したという。さらに大澤は「理想の時代のありかたを裏面から映し出している」犯罪として、1986年のNによる連続射殺事件を取り上げる。それは、理想が強調されればされるほど、「立身出世や成功といった理想との相関で」理想への接近が阻まれ、理想からかけはなれた現実には深刻な挫折感や疎外感を感じた結果の事件であるという。つまり、「理想」の幻想性、さらには「理想」が生み出す抑圧性というのが、問題になってきたわけである。こうした戦後社会の転換期の文脈において、彼らの思想的な転換も理解することができる。

3. 「新しい子ども」の登場と「虚構の時代」

このように、「反権力」というこれまでの戦後社会を支えた「理想」が行き詰る中で、自らの「理想」に幻滅した彼らが1980年代に出会ったのは、教師の指導を受け入れない「新しい子ども」であった。その要因として彼らが挙げたのは、第一に「理屈抜きの強制」を嫌う戦後社会の理念によって、親や教師が子どもに有無をいわさない強制を行わなくなったことである。第二に、都市化によって旧来の共同体からの個人の離脱が生じたことで、共同体を背後にした学校の権威が低下したことであった。第三に、消費社会において子どもは、自らの欲望にしたがって選択を行うことが求められ、共同性を基盤とした学校教育の論理とは相容れなくなったことである。このようにして「新しい子ども」は、「共通認識としての規範」を失い、またそれによって自己とその外を区別できない状況に置かれていると彼らが述べる状況に至った。

土井(2003:122-123)も、「生まれた時からすでに完結した個性を備えており」、「この世界に生まれ落ちたその瞬間から、大人と対等な一人前の人間と感受されている」子どもについて、「彼らには、社会化による成長という観念が欠落している」と述べる。

このことは、大澤の論における「虚構の時代」へ移行したこととパラレルである。大澤(2008:68)によれば、「現実を秩序づける反秩序の中心的なモードが虚構であるような時代」、すなわち「虚構の時代」が到来したという。そこでは、「現実すらも、言語や記号によって枠づけられ、構造化されている一種の虚構と見なし、数ある虚構の中で相対化してしまう態度によって特徴づけられる」という。そして、「未来において現実に着床することが予期されている反現実」としての「理想」に対して、「虚構は、もはや現実の範疇外にある」という(大澤、2008:3)。現実社会に着地しえない、そこから切り離された「個性」という意味で、先に土井の述べた「個性の本質主義」というのも「虚構の時代」の産物として理解できよう。

一方で、デュルケムによれば、教育の任務とは、個人の内面に「社会的存在」を形成することであり、「規律の精神」、「社会集団への愛着」、「意志の自律性」という道徳性の三要素において、個人と社会との結びつきを作り出すことであった。そして、「社会」とは「神の一切の現実性をすべて包含」し、その権威の力によって人々を服従させる(Durkheim, 1925=2010:129)。

このように考えるとすれば、自己の欲望を絶対視する「新しい子ども」に対して、学校教育の権威を復権するには、教師の怖さだけでは不十分である。教師の個人的な怖さに対する服従を超えて、デュルケムが強調するように個人主義を担保するところの「社会」への畏敬の念を涵養することができるかが問題となる。この点は、いわゆる「愛国心教育」においても同じ問題が問われよう。

(引用文献)

- 大澤真幸 2008『不可能性の時代』岩波新書。
土井隆義 2003『非行少年の消滅』信山社。
Durkheim, Emile. 1925, *L'Education Morale*, Librairie Alcan. (=2010 麻生誠・山村健訳『道徳教育論』講談社学術文庫。)
広田照幸 2001『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会。
見田宗介 1995『現代日本の感覚』講談社学術文庫。
諏訪哲二 2005『オレ様化する子どもたち』中央公論新ラクレ。